

当別田園型コーポラティブ住宅づくりの展開をめざして

当別町農村都市交流研究会
(北海道当別町)



当別町金沢地区の里山のある風景



第1期田園型コーポラティブ
住宅1



第1期田園型コーポラティブ
住宅2

I. 活動の背景と目的

当別町は札幌から北に向い石狩川を渡り約25km、都市近郊といえる位置にありながら、いまだ豊かな自然の残る農村地域である。土地利用は石狩川北岸の低地に広がる農地と市街地ゾーン、里山ゾーン、山地ゾーンと4つのゾーンがあり、山地ゾーンは「道民の森」、「環境の村」など北海道庁が自然レクリエーションや環境学習の道内拠点と位置づけているエリアでもある。活動の主舞台となる当別町金沢地区の里山は、この山地ゾーンと市街地、農地の各ゾーンが交差するエリアであり、今後の当別町の地域づくりにおいてもっとも重要な場所となる。

1998年4月に、この重要な地域資源でありながら長く放置されていた里山環境の保全活用をめざして、当別町農村都市交流研究会が有機農家や地域リーダーにより結成された。活動は北海道移住応援ツアーの開催や、1999年3月には当別町のまちづくり助成支援も受けた地域づくりのワークショップ－文化は田園にあり－を行い、当初のメインの活動テーマであった里山活用の田園住宅プロジェクトは、1999年冬には最初の2家族の住宅完成移住があり、その後全国からの問い合わせも多くあり、田園居住に関する社会的な関心の高さを認識した。

また研究会メンバーの牧場において、バイオガスによる自然エネルギー活用実験や草地牛乳の生産等の地域づくりの環境的取り組みなども行ってきており、地域資源としての里山の環境を住だけでなく、農やエネルギー、環境などの面でも、総合的に活かしていく方法の開発をテーマとして掲げている。

II. 活動の内容

今回行った活動は、次の4つである。①優良田園住宅制度とリンクする田園型コーポラティブ住宅の事業の展開、②田園型コーポラティブ住宅の第2期プロジェクトのスタート、③里山活用ワークショップの開催、④地域の環境認識や問題を考える勉強会等の開催

2-1. 優良田園住宅制度とリンクする田園型コーポラティブ住宅の事業の展開－当別町の優良田園住宅の基本方針づくりと金沢地区指定に向けて－

優良田園住宅制度は農地においても都市住民が土地を取得して、住宅をつくることが可能になる法律である。そのため自治

体が地域指定する必要がある。当別町では、研究会が行った田園型コーポラティブ住宅のパイロット的な事業の展開で、田園住宅の意義や環境づくりの重要性が理解されるようになり、町レベルでの地域指定がようやく検討課題となってきた。

行政との協働による当別町の優良田園住宅の基本方針づくりと金沢地区指定に向けての作業は、2002年7月に検討委員会を開くことができた。その後、優良田園住宅を含めた金沢地区的地域像などの全体構想づくりの検討に8月～11月の時間を費やした。全体構想の絵姿と主要プロジェクトの実施方法が見えてきたことで、いよいよ具体的な優良田園住宅の基本方針づくりに着手することになった。合わせて町内部の推進体制づくりも進み、12月に町の担当部局との合同の委員会を開催し、実施案をつめていくことになった。その後は町内部での調整等の作業になり、2003年の6月頃までには、基本方針の策定が終わり、金沢地区などの具体的対象地区の指定も行われる予定となつた。

2-2. 田園型コーポラティブ住宅の第2期プロジェクトのスタート

田園型コーポラティブ住宅の第1期プロジェクトは、2002年10月に山裾に5軒建設した第1期プロジェクトが完成し、いよいよ本格的な第2期プロジェクトのスタートをめざすこととなった。しかしこれは当初予定よりは少し遅れ気味の事業になっている。その原因は、土地の確保の問題である。第2期プロジェクトは、農地の転用も含めた優良田園住宅制度を活用した、本格的な田園住宅づくりを予定していたが、上記の町との優良田園住宅の基本方針づくりが半年～1年ほど遅れて、なかなか候補となる土地（今年は非農地が対象）が手当できなかつたからである。

募集活動は当初4月に予定していたが、実際は10月開催になった。2カ所の土地が確保できて、10月10日の土地見学会には10家族集まり、関心の高さが伺えた。その候補者の中から、来年度には1,2のプロジェクトが始動するであろうし、秋以降においては、優良田園住宅法に基づく、田園住宅づくりも着手できると考えている。

2-3. 里山活用ワークショップ

当別の里山は南に平坦な農地、後ろになだらかな丘陵を背負ったひだの多い山裾の部分にあたる。針葉樹、ナラやカエデなどの広葉樹の林と、畑に使える平坦部と点在するため池。自然豊かでありながら人間の手が入ることにより親和性をさらに高めることのできる環境づくりを考えるワークショップを9月14日に開催した。役場、研究会、地区住民、当別町民、札幌からなど約30名参加があった。

旭川の里山で先駆的に蹄耕法による草地づくりを行ってきた



ワークショップ「21世紀型里山づくりをめざして」



懇親会「当別産品を味わおう」

斎藤晶氏の講演会と里山活用アイディアワークショップを開き、里山と森を拓く環境づくりの具体化を模索し始めた。このワークショップは1998年に行った当別町ワークショップ－文化は田園にあり－の続編になり、実際田園住宅づくりのプロジェクトが進んだなかで、今後の当別町の地域づくりの方向、都市と田園交流のあり方の展開が語られるワークショップになった。



斎藤晶氏講演「牛が開く牧場」

2-4. 地域の環境認識や問題を考える勉強会等の開催

2002年は合わせて、当別での環境NPOの立ち上げ（特定非営利活動法人当別エコロジカルコミュニティ）と当別川でのワークショップの開催（7月）、里地ネットワークの講演会（9月）、エネルギー問題の勉強会（11月）など、研究会メンバーの環境問題への関心拡大と、里山環境の再生保全の更なる展開に向けて一歩を踏み出した。

III. 活動の効果及び今後の課題

今回の活動の成果はなによりも、今まで直感的に行ってきた当別町での里山活用のアイディアを、住から農、環境まで総合的かつ戦略的に活用・保全していく大きな背骨にあたる基本方針を確立したことがある。具体的なその内容と今後の課題も含めて述べると以下のポイントになる。

3-1. 里山活用のワークショップから里山自然公園化プロジェクトへ

里山活用のワークショップは今回、旭川の斎藤晶氏をゲストとしてお呼びし、動物の力を活用した蹄耕法による里山の草地づくりの方法を学ぶことができた。この里山活用のワークショップはインパクトは大きかった。このワークショップとともに、当別金沢地区の里山活用について、研究会のワーキンググループは熱中して作業に取り組み、2003年1月に「当別金沢・里山園づくり構想」をまとめた。

里地里山の環境とは、野焼き、薪等の採取といったように、人間が生活のために利用し適度な攪乱をもたらすことで成り立ち、日本人の暮らしと環境観の基盤となってきた生態系である。しかし明治、特に昭和30年代以降、エネルギー利用の変化等により、暮らしの中の里山と生業との関わりが失われ、里山環境は大きく変貌した。現在日本のRDB種（注）の5割が、この放棄され生態系が変わった里山の中に生息すると言われる。今後里山環境の生態系を回復し、再生していくには市民の環境学習や農林業体験などの取組が一層重要になるが、国土の25%を占めると言われる広大な里山の再生にはボランティア的取り組みだけでは明らかに限界がある。新たな方法論が求められており、今回の里山ワークショップを契機に発見したテーマは3

(注) : RDB種

RDB = レッド・データ・ブックの略
絶滅した、もしくは絶滅しそうな生物をリストにしたもの

つある。

①里山の活用と環境的多様性の回復の視点、②公共事業という方法を使わない里山の活用・保全の仕組みづくり、③里山の環境再生を家畜の力を使って行うという手法の展開、の3つである。今後、当別農村都市交流研究会が活動の方針とする「牛が拓く」里山自然公園づくりとは聞き慣れない言葉と思うが、「蹄耕法」という牧畜の原点に立つ技術を用い、里山林を残しつつ草地を育成し、生業とのかかわりをもった里山の環境的多様性を回復し、家畜の放牧と市民的利用の共存可能な緑地環境の創成を行うプロジェクトである。

その具体的な内容は、

(1) 「牛が拓く」里山自然公園・実施デザインづくり

当別町金沢地区の町有林（約500ha）を活用し、林地に不適切な場所を蹄耕法（牛や羊の蹄が地を耕し草地を育成する方法）を用い草地を育成する実施計画づくりを進める。蹄耕法の先駆的実践者を旭川から招き、現地調査を行い、保存林と牧区の設定、環境デザイン、飼育頭数、放牧期間、草地育成の手法、事業スケジュールと費用概算、管理の方法などの実施デザインを検討したい。

(2) 「牛が拓く」里山自然公園・試験プロジェクトの実施

2003年の春から夏期期間に、町有林の一部を活用し、試験プロジェクトとして、牧柵の設置と実験草地化と放牧を行い、事業化の課題を検討する。（すでに町役場と町有林の活用について折衝し、基本方向で承認をえている）

(3) 里山活用環境学習ワークショップの開催

春と秋に親子参加の環境教育プログラム（自然観察や環境調査、遊歩道づくり、暖房用の薪づくり、山菜ときのことり）ワークショップを行い、当別の里山環境体験活動を行い、合わせて家畜監視小屋として活用する、ストローベイルハウス（藁ブロック活用の建物）のモデルエコハウスをアメリカの技術者とも交流しながら、ワークショップ形式でつくりあげる。里山活用環境学習ワークショップはNPO法人当別エコロジカルコミュニティ（TEC）と協力して行う。

プロジェクトはすでに当別町長、北海道庁などの関係者の了解活動も行っており、この里山公園化プロジェクトのパイロットプランを順調にティクオフさせ、今後10～15年で数百haの大自然公園を、有機的手法によってつくりあげたいと考えている。

3-2. テーマコミュニティ型の田園住宅づくり

今後の田園住宅づくりは、単なる里山の住宅地としてだけではなく、さらに発展形として、金沢や当別の地域特性や農業の特



当別金沢地区の里山内の遊歩道



ワークショップ風景



第2期田園型コーポラティブ住宅
1



第2期田園型コーポラティブ
住宅2

产品とも連携し、以下のようなテーマ型のコミュニティづくりもめざすものとしたい。

「花とガーデニング田園住宅コミュニティ」

花とガーデニングをテーマにした庭や街並みづくりをめざす
コミュニティ

「パーマカルチャーコミュニティ」

有機的な資源環境循環をめざすエコロジー重視のコミュニ
ティ

「マイミルクコミュニティ」

自家ミルク生産消費のコミュニティ

「マイホースコミュニティ」

馬好きをテーマにしたコミュニティ

「マイエッグコミュニティ」

自家卵生産消費のコミュニティ

「マイファームプロダクトコミュニティ」

特色ある農產品加工販売のコミュニティ

3-3. 「石狩川・田園・里山・森」づくりへの展開

われわれ当別町農村都市交流研究会の活動は、金沢地区の里山を主な活動領域に

- ・里山の山裾に立地する「コーポラティブ型の田園住宅づくり」
- ・里山の町有林を再生活用をめざした「牛が拓く自然公園づくり」
- ・南側の田園地帯と交流拠点の新規就農「交流による元気のある農村づくり」

などの里山田園つくりを目標に進めているが、もうひとつ踏み込んで、当別町の母なる存在である石狩川、当別川と、田園と里山と森（道民の森、環境の村）という、川から山までの連続する環境要素をいかした当別町の有機的でかつ環境保全活用型の地域づくりをめざす取り組みに広げていこうという発想も生まれてきている。

札幌から1時間の距離でありながら、都市近郊のスプロールした風景とは明らかに異なる農村風景を残す町、当別町。この風景が保たれている背景には石狩川の存在がなによりも大きい。名著「石狩川」の著者・本庄陸男の生誕地でもある当別町において、石狩川の存在をあらためて問い合わせし、最大の地域資源でありながら、普段の生活では「見えなくなりつつある川」、「分断要素としての川」の積極的な意味を地域の生活環境調査を通して明らかにしていく。町民参加のワークショップなども行い、里山環境の活用活動とも連携し、川と田園と里山と森（道民の森、環境の村）という、川から山までの連続する環境要素をいかした当別町の地域づくり構想実現に向けて、第一歩を踏み出したいと考えている。

<団体活動データ>

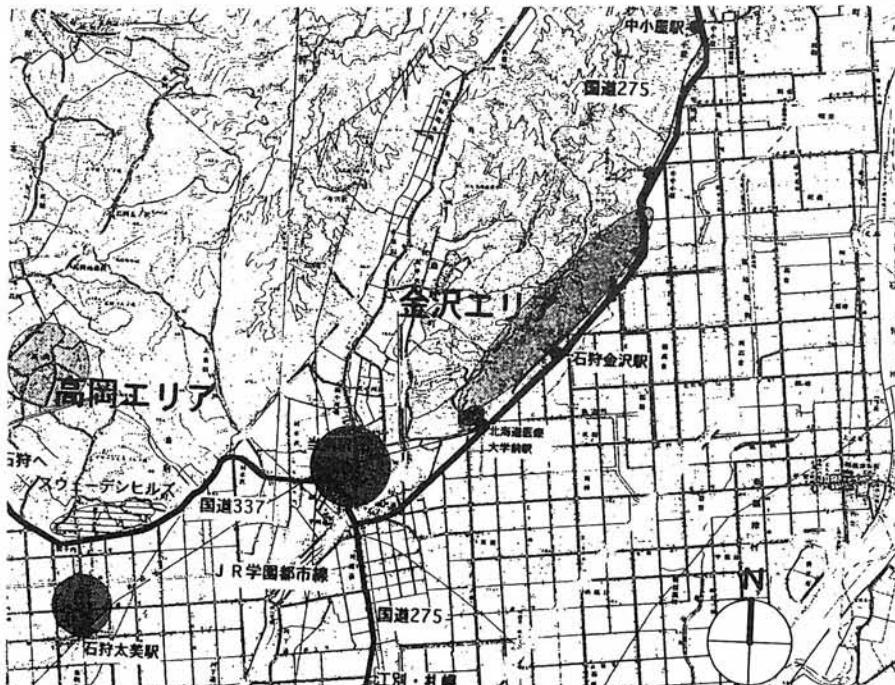
■当別町農村都市交流研究会

| | |
|-------|--|
| 活動テーマ | 当別田園型コーポラティブ住宅づくりの展開をめざして |
| 活動目的 | 北海道当別町における里山の自然を活かした豊かで魅力あるコミュニティづくりをめざす。里山を舞台に田園型コーポラティブ住宅の建設と、里山を活かした都市近郊農村の地域共生型開発モデルを開発。 |
| 設立年月 | 1998年4月 |
| 代表者名 | 小谷栄二 |
| 活動地域 | 北海道当別町金沢地区 |
| メンバー | 11名 農業資材販売、建設業、建築家、住職、農産物加工、養鶏業等 |

●団体設立の経緯

札幌市北区のあいの里でコーポラティブ住宅をつくった時に知り合った、建設業社長や建築家、当別の農業資産販売業のメンバーが、地元でもある当別町で、地域資源を活かした都市住民を誘致する田園型コーポラティブをつくろうと話したのがきっかけ。地元で農業を営む人にも声をかけ、研究会を設立した。

活動地域図



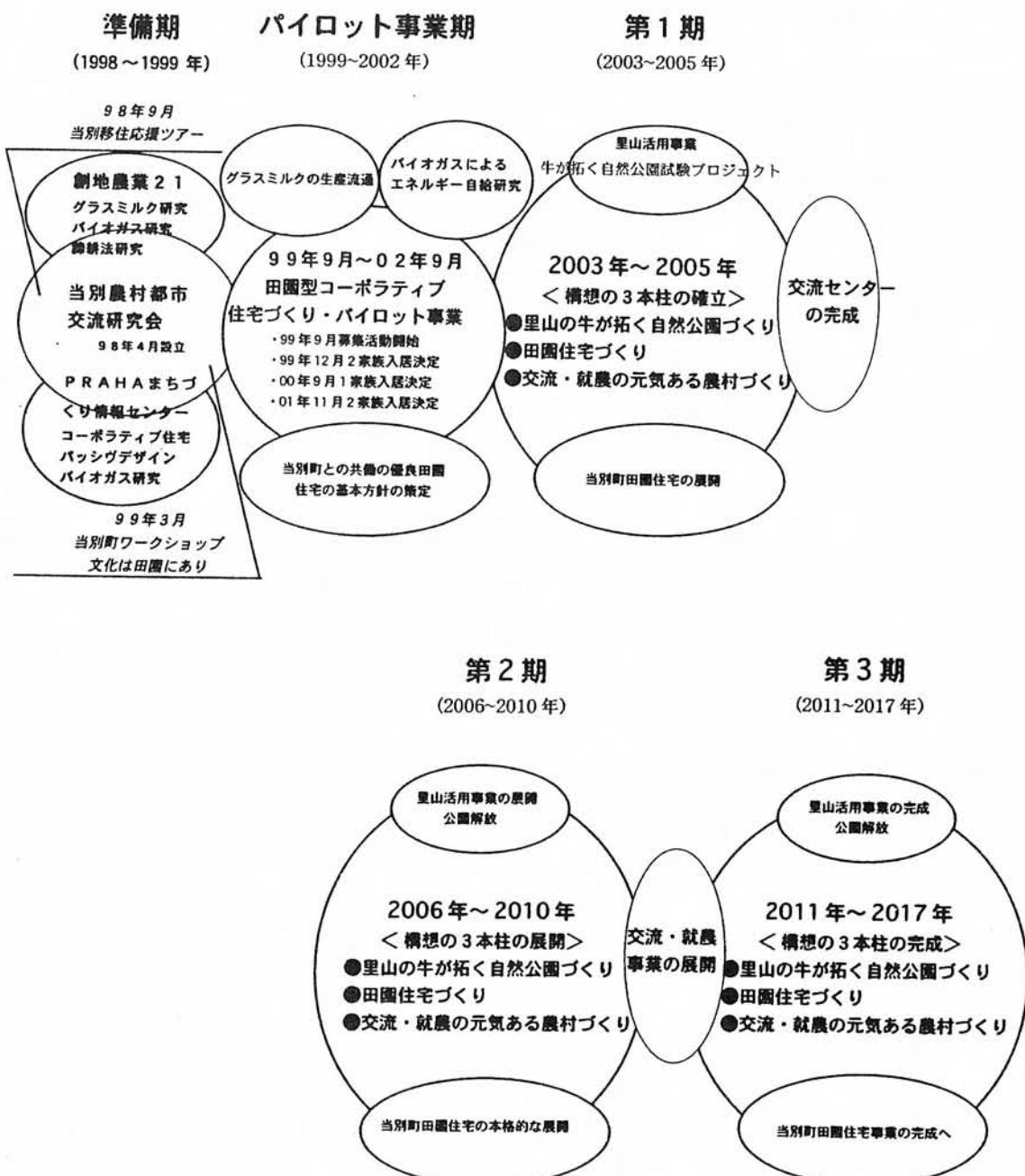
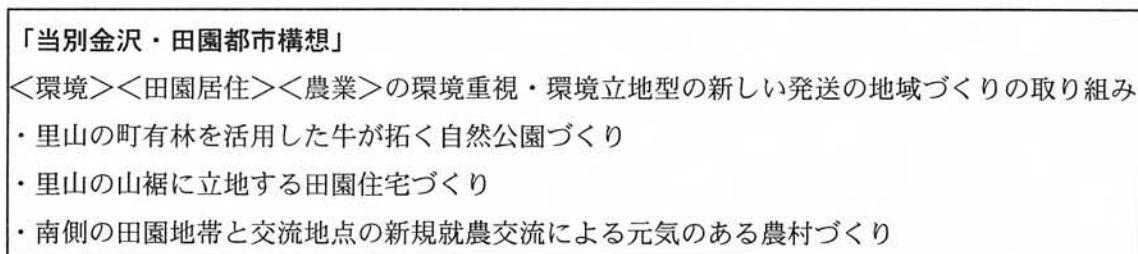
舞台となる当別金沢地区は石狩川を渡り、北に向かい約25km、都市近郊といえる位置ながら、自然豊かな里山の残る田園地域である。自然の中で土や林にふれながらの暮らししが可能となる環境は、居住の場として魅力的だし、都市への通勤も可能な距離の位置にある。

当別の魅力はさらに、酪農、花、有機農業、卵、など農的暮らしの分野で活躍する地域の人材に恵まれていることである。

地形的特徴も石狩川の北岸に広がる農地ゾーン、丘陵端部に位置する里山ゾーン、山地の自然環境ゾーンと、求められる農と暮らしの地域づくりを進めていくうえで、土地利用の構造が明快だ。

●活動の全体像

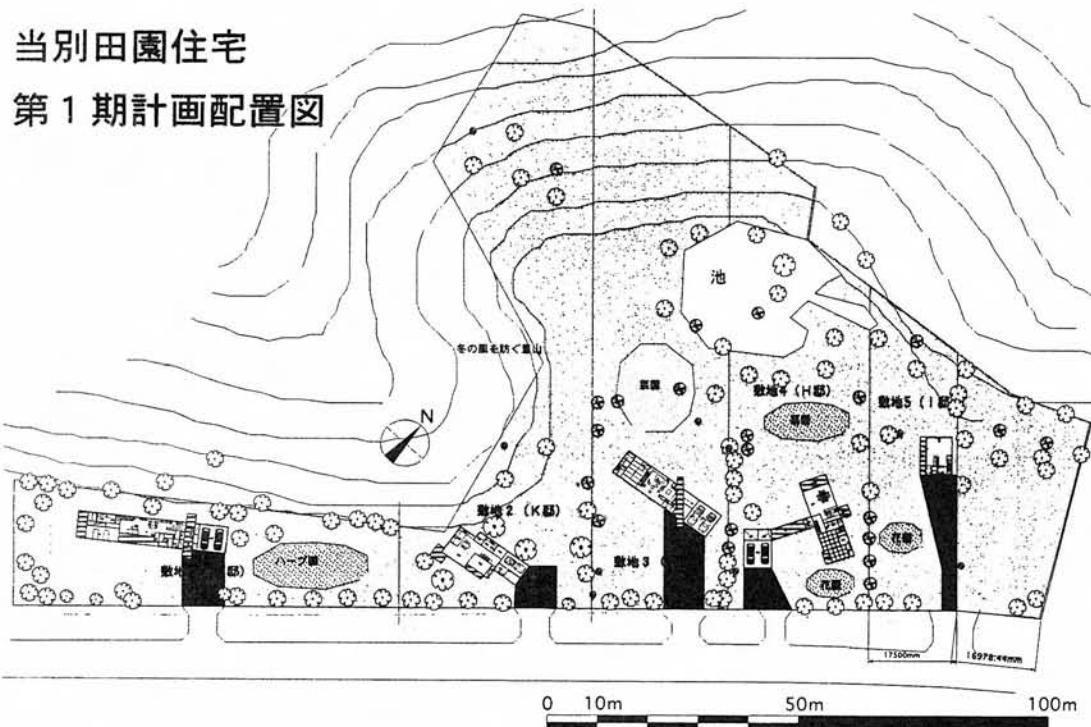
田園型コーポラティブ住宅を先行的に進めつつ、「当別金沢・田園都市構想」を掲げ、メンバーの職能を活かし、住宅づくり、里山の自然公園化、元気ある農村づくりを展開しようとしている。



●これまでの活動

金沢地区において、コーポラティブ方式で5戸の住宅建設を行った。応募者にあらかじめ地域を知つてもらうために、研究会メンバーによる説明や紹介を行つた。入居世帯決定後は、入居者が集まるイベントやワークショップを開催するなど、計画づくり及びコミュニティづくりを支援した。

- 1998年 土地候補探し、同年9月移住希望者を募るために当別移住子応援ツアーオンライン開催
- 1999年 プロジェクトのアピールのために、「当別町ワークショップ文化は田園にあり」開催
10月募集パンフレット開催。参加者のヒヤリングを3回開催。
- 2000年 2月、2世帯決定着工。3月、1世帯決定着工
- 2001年 1月 2世帯決定着工



●助成対象活動

第1期のコーポラティブ住宅が終了し、別の土地に第2期のコーポラティブ住宅の募集を始めた。また、里山を活用したプロジェクトをスタートさせ、環境問題への関心の拡大に向けて地元との環境NPOと協働したワークショップを開催した。

・コーポラティブ住宅の第2期プロジェクトのスタート

当別町の元中学校跡地を、メンバーの建設会社が購入し、そこを敷地に全5世帯の住宅を建設予定。2002年10月に、土地見学会の開催。入居の募集を行つた。

・里山活用ワークショップ

2002年10月に「当別里山ワークショップ」を開催。参加者30名

旭川で、蹄耕法と呼ばれる草地づくりを行っている斎藤晶氏の講演会と、里山活用アイデアワークショップを開く。

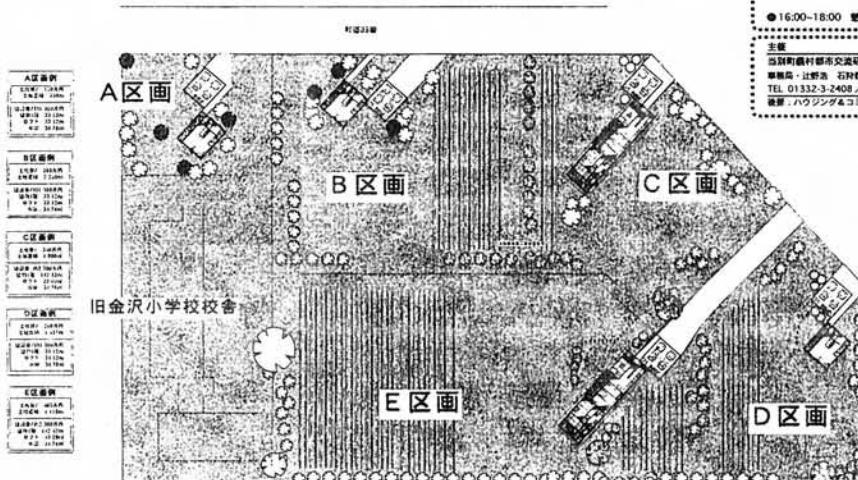
・里山環境学習ワークショップ

当別町で立ち上がった環境NPO「当別エコロジカルコミュニティ」と協力して行った

2002年7月 当別川ワークショップ

9月 里地ネットワーク講演会

11月 エネルギー問題勉強



当別田園住宅第2期計画敷地

●これからの活動

・第2期の住宅づくりの完成

・「牛が拓く」里山自然公園・実施デザインづくり

当別町金沢地区の町有林（約500ha）を活用し、蹄耕法を用いた公園づくりの実施デザインづくり。

・里山公園化実験プロジェクトの実施

2003年に、町有林の一部を蹄耕法を用いた草地化実験を行い、事業化の検討を行う。

・里山活用環境学習ワークショップの開催

春と秋に親子参加の環境学習ワークショップを行い、あわせて家畜監視小屋として活用するストローベイルハウスのモデルハウスをワークショップでつくる。